

エーリッヒ・フロムを基底とした 環境教育理念構築へのアプローチ

今 村 光 章

Searching for the construction of an ideal of environmental education

IMAMURA Mitsuyuki

はじめに

人間は消費活動や経済活動を通じて自然環境を破壊してきた。そしていまや、地球環境問題は、現世代の人間ばかりではなく未来世代にわたってその生存と福利を脅かす根源的問題となっている。そうした人類の生存の危機を克服するために、環境教育が脚光を浴びつつある。だが、消費活動や経済活動においては、私利私欲が優先し、環境によいとされる生き方やライフスタイルが十分に理解され実践されることが困難な状況にある。その理由のひとつとして、環境教育の理念が十全に確立されていないことが挙げられよう。そこで、ここでは環境教育の理念を再構築するために、エーリッヒ・フロム (Erich Fromm 1900-1980) の論を基底としたアプローチを試みたい。小論は、フロムの論に従い、人間存在に本来的に根差す「持つ存在様式 (the having mode of existence)」と「ある存在様式 (the being mode of existence)」の内実に迫り、フロムの人間観から得られる豊かな示唆を、「環境教育」の理念形成に生かすとともに、将来の教育の方向づけにも生かそうとするものである。たしかにそれは完全なフロム論でもなければ、環境教育論でもない。小論のねらいが一体どこにあるのかが問われることになるかもしれない。だが、それは承知のうえで「ある存在様式」による教育の可能性を模索してみたい。より詳しくいうならば、「ある存在様式」の優位に基づいた社会的性格という概念を、環境教育の理念のみならず教育一般のなかにも受け入れる可能性があるかどうかを探してみたい。さらには、環境教育に内在する諸問題を指摘し、その克服へ向けての包摂的理念を提示することを意図している。

一節 フロムの基本的立場と教育学への受容

フロムの没後十五年が過ぎ、彼が憂いていた通り、しだいに地球環境が危機的な状況になり、彼の未来社会へのメッセージが、ますます時宜を得た現実的なものとなりつつある¹⁾。しかし反面、現行の社会経済的体制の維持が人間の福利に優先される社会状況にあっては、その声はかき消されつつあるようにも思われる。精神分析と社会心理学的手法を用いて、人間存在の在り方に

アプローチしてきたフロムは、1955年に既に『正気の社会 (“The sane society”)』²⁾において消費による人間の精神的疎外を鋭く指摘している。以後、さらなる分析を加え、地球環境への関心が高まりつつあった1970年代の半ばの1976年には『生きるということ (“To have or to be?”)』³⁾で、人類の肉体的生存の危機を指摘し、その回避を目指す方法を提示するに至った。このように、彼は後半生を通じ、消費や環境破壊による精神的・肉体的危機を克服するための人間の在り方についての道標を示していた。こうした点から、フロムは徹頭徹尾、人間が生きるということに意味と勇気を与えてくれる「人生の教師」⁴⁾であると言えるであろう。

この「人生の教師」は、大衆を対象に読みやすい著作を次々と著し、理解しやすい理論を展開してきた。この手法によって、フロムは人間存在の生に関わる潜在的なオルタナティブを提示し、普段の生活とは違った別のオルタナティブが存在すること、およびその一方を選択する可能性が存在することを、我々に気づかせてくれた。そこには人間を善なるものへと導いて行こうとする強い啓蒙的姿勢を感じずにはおれない。しかも彼は神秘的姿勢や宗教的説得によって人間を触発しようとするのではない。彼自身の精神分析の実践や生活実践から導かれた人間存在への洞察から、我々の内なる人間性に訴えかけ、そこで得られる自然な心理的共通理解を基軸として、我々に深い人間性の淵を覗かせるのである。なるほど確かに、このような共感的理解は、実証性の点からは確たる保証を得られないかもしれない。しかも哲学的・社会的に完全な理論を作り上げてもないだけに、整合性がないと批判される場合もあろう。そうした批判を差し引いても、フロムのラディカルな「ヒューマニズム」は、人間の深遠な構造を我々に理解させ、その善性に訴えかけるからこそ、人間を納得させると言わねばなるまい。フロムの著作が世界各国でベストセラーになっていることが、まさにこの事実を裏付けていると言えよう。

さて、フロムは1941年に『自由からの逃走 (“Escape from freedom”)』⁵⁾で名声を博し、『愛するということ (“The art of loving”)』(1956)⁶⁾や『生きるということ』(1976)で大衆に人間の生き方を示すことで衝撃を与えた“流行の作家”である。しかも『正気の社会』や『希望の革命 (“The revolution of hope”)』(1968)⁷⁾といった著作では、政治学や社会理論へ一時的侵入を図った“好事家”であると見なされることも少なくはない⁸⁾。どちらかといえば、彼は哲学や精神分析の本流からも離れ、学者というよりもむしろ大衆作家であると考えられがちである。

一方また、フロムを学問的色彩から分類するならば、彼は1930年から1938年までフランクフルトの社会研究所に属したことから、ホルクハイマーやアドルノ、マルクーゼらと並んで、フランクフルト学派や批判理論の論者の一人として名を挙げられることもある。だが、それは彼の仕事の一部を表すに過ぎない。彼はまた、マルクスとフロイトの発見を継承し融合した社会的心理学者として、渡米後ホーナイやサリバンなどとともにネオ・フロイディアンの一人名として称せられることもある。だが、それとても彼に冠する主流の呼び名ではない。といっても、フロムが大衆に分かりやすい著作を著しつつ、社会学と精神分析の分野に跨がって、偉大な仕事をなし遂げた人であることが理解できるのである。

こうしたフロム理解からは、直接的にフロムを教育学と関係づけることはできない⁹⁾。だが、次のようなことを明らかにしたという視角からなら、フロムを教育学のなかに受容することは可能であろう。第一に、社会的分析の見地から、人間は生活実践の際の社会的経済的条件によって性格学的に形成されるということ、第二に、精神分析の見地から、人間は無意識な生命力によっ

て決定されるということ、第三に、「社会的性格を精神分析的・社会的に意識化するために、すでに存在する教育の見方を豊かにしたこと」¹⁰⁾である。つまり、人間は社会関係の産物であり、生活様式及び社会経済的構造と相互に力動的に形成しあう存在であること、しかも比較的客観的で不変な無意識的な力が人間にあり、その力との力動的関係によって人間が決定づけられていることが彼によって明らかにされたのである。さらに、社会経済構造及び生活体験と社会的性格 (social character)、人間性の典型と社会的性格が、それぞれ二重のダイナミックな構造的関連にあることが指摘されたことが重要であろう。わけても、その過程で「人間性 (human nature)」について、それを方向づける二つの潜在的な方向性を明確に示したことがフロムの功績であるといえよう。というのも、現在の環境問題を目の前にした我々人類にとって、その二つのオールタナティブを自覚し、選択せねばならない状況に直面しているからである。とはいえ、その状況は表面的な二者択一の問題ではない。詳しくは後述するが、『自由からの逃走』で全体主義の心理的分析に用いられて以来、社会経済的構造の維持装置として受け入れられている社会的性格を批判的に意識化することにより、逆に変革への糸口とする、人間と社会に対する新しい見方に意義が見いだされるのである。このように、フロムの「人間性」概念に迫る際には、社会変革を試みようとする意志を見落とせまいだろう。

以上のように、小論では、フロムが精神分析の実践と社会理論から、「人間性」への二つの潜在的な在り方を示し、しかもそれを社会的性格論と結び付け、教育的にも受容できる社会変革論へ展開しうる可能性を開いている点に注目し、そこから出発したい。ただ残念ながら、社会的性格論自体は精緻な理論ではなく、実証性の面からはあまりにも多くの問題点を孕んでいると言わねばなるまい。だが、フロムは社会的性格の下位構造を、より明確な二元法、即ち「存在様式」という形で明らかにし、さらにそれが「人間性」に由来することを示している。しかも、大多数の人々がフロムをヒューマニストとして定義し、その概念を受容する。それは、彼の人間観が「人間性」についての的確に描写しており、それを受け入れようとする素地を我々が備えているからである。もっともこのようなフロムの言う「人間性」は、決して固定化したものではなく、無限に打ち延ばすことのできる柔軟な概念でもある¹¹⁾。そこにはやや込み入った複雑な抽象的概念と若干の不整合さや矛盾はある。その上フロムは、大衆にも理解可能な形で論を進めようとするために、若干の無理があっても、敢えて二分法をとる。その方法は理解しなくてはなるまい。ただし、この二つのオールタナティブは社会的性格を決定づける方向性でもあり、人間存在の生の全体性——生活、社会、経済、文化、経験——の在り方を左右する必須の二つのベクトルであることは確認しておきたい。人間の社会的な生活はこの二つのベクトルの和として示され、しかもそのベクトルが社会経済的構造と基本的生活体験によって、影響を受けるのである。よって二つの可能性は、対立した構造の中にあるのではない。どちらも生物学的に物を食べ住み着くという“持たねば”ならない人間の本性と、少ないながらも食べ物を“分けて”食べなければ生きられなかった生物学的な条件に根差す人間の潜在的な可能性なのである。

従来、フロムは「自発性」と「受動性」¹²⁾、「生産性」と「非生産性」¹³⁾、「バイオフィリア」と「ネクロフィリア」¹⁴⁾といった二つの要素で人間の善性・悪性といったオールタナティブを原理的に説明してきた。「ある存在様式」と「持つ存在様式」もこの延長線上にある。つまり、概念的な若干の修正が必要ではあれ、フロムがそれぞれ人間の善性、悪性を示そうとした性質は、概し

て「ある存在様式」と「持つ存在様式」に集約できるのである。両者はともに人間の人間性そのものに含まれる潜在的な可能性 (potentialities) であり、人間が生きて行く上での生物学的な諸条件に根差した必要不可欠の様式である。故にそのどちらもが、人間の社会的性格を決定づける。しかしフロムは、意識的にも無意識的にも、善性を示す「ある存在様式」に価値をおき、それがやがて開花することを信じている。彼自身は「人間は何が善であるかを知ることができ、そしてしかも自らの本能的な可能性を理性の力に従って行為することができる。人間性は先天的に善なのである」¹⁵⁾と述べる。ここで示されているように、フロムにおける「人間性」は理性の援助を受けつつ善なるものへ向かって開花する先天的性質を有するものとして把握される。フロムは社会学的相対主義に基づいてはいない。「正気の」人間や社会と言うように、人間存在に客観的な解答を与える普遍的な規範が存在するという規範的人間主義の立場に明らかに立脚している。例えばそれは、彼にとっては「人間こそ万物の尺度」であり「人間存在より高次で崇高なものはない」¹⁶⁾という人道主義的な立場 (the humanistic position) をとるといふ言葉にも如実に現れてくるのである。こうした彼の立場からすれば、最終的には「ある存在様式」が優位となる人間と社会が出現するというユートピア像と、性善説に立つ信念 (faith) と希望が伺い知れよう。このような人間観はフロムの人生を通じてどの著作にも見受けられる。このように、人間存在に存する二つの「存在様式」を発見し、その一方にフロムが価値をおいていたという基本的理解の構図のもとに、彼の「ある存在様式」と「持つ存在様式」を了解したい。そのうえで、教育に対する示唆——具体的には環境教育の理念形成に導入可能な概念——を探らなければなるまい。

二節 フロムの人間観と二つの「存在様式」

フロムによる人間の原像は、理性によって人間が自然からは解き放たれた時点においてはじまる。そしてまず、人間を自然から切り離された「独立した存在者 (a separate entity)」として把握する。次に、動物的な調和を失い、自然との「断絶 (split)」を余儀なくされ、自己意識、理性、想像力を備え、それゆえに意識と理性の対象たる対自的な対象化された自己自身 (himself) とも「断絶」するという。このように実存にかかわる二つの「二分性 (dichotomy)」をもつ存在者としてフロムは人間を規定する。そして更に、人間 (man) が人間自身 (himself) から「断絶」しながらも、それを克服しようと自己と自己との間に調和をもたらそうとする努力 (striving) が、何をおいても人間の諸力の源泉であるとフロムは措定している¹⁷⁾。しかし、この自己と自己自身の懸隔に芽生えた内面的「断絶」を克服するには、人間は無限の努力を強いられる¹⁸⁾。しかも、自らのうちに備わった人間的諸能力を能動的に使うといった意味での「生産的 (productive)」な努力の方向性はあるものの、フロムはこの努力の過程に終着点や完成を認めているわけではない。だが、こうした「二分性」克服の努力により、絶えず自らの内に働きかけ (act)、無限な連鎖のなかでその都度変容する自己に再び働き返す (react) ことで、極限的な意味での調和の状態に接近する。フロムにとって、こうした努力の方向が肯定されるものであり否定されるものであれ、「断絶」を埋め合わせたいという自己証明の欲求は人間を成立させる基本的な強い情動でもある。よって、この情動が皆無の人間は、フロムにおいては、精神病理学的に「正気」でないとして、非人間的な状況に陥っているとされる。しかし彼は、こうした病的なものも正常なものも含めて、

人間性のあらわれであるとしている。

もっとも、この働きかけに成功した場合、人間は自己実現 (self-realization) を果たし、彼の信念上、最高次の人間のあるべき姿となる。その場合の人間の働きかけが「ある存在様式」に根差しているといえよう。だが一方、不成功に終わる場合であったとしても、自己意識が満たされない場合、「正気」を保つために、「二次的な自己意識 (a secondary sense of self)」¹⁹⁾ を擱んで自分自身を救い、完全な非人間的化だけは回避するという。この場合の人間の働きかけは、「持つ存在様式」に根差している。以上のような人間が直面する状況の可能性を、フロムは人間の本質規定のうちに抱いており、そこに「ある存在様式」と「持つ存在様式」の原像を辿ることができる。だが、この自己証明への努力を中心とした「人間性」の原像のなかで、フロムは不成功の場合を完全に否定してはいない。

ただし、以上のようなフロムの「人間性」への信念はそれだけで了解されるのではなく、前述したように、社会的性格論と社会変革論ともいうべき論とともに総合的に吟味し理解されねばならない。フロムの社会的性格論によれば、社会的性格を媒介として、ある社会の社会経済的構造とその社会の人々の基本的な生活は連動し、社会集団の「安定剤 (cement)」ともなれば「起爆剤 (dynamite)」ともなる。とはいえ、この社会的性格は全く自由な可変的性質をもつものではない。フロムの言うように、人間自らのうちに破壊できない性質 (qualities) をもち、それによって社会的性格も構成されている²⁰⁾と理解されるべきであろう。かつてフロムが最初に社会的性格論で言及したのは、ある時代におけるある集団に共通の性格の母体であった²¹⁾。しかもそれが、特定の社会の人間の性格とエネルギーをその社会が持続するように機能するといった機能面での「安定剤」である、との批判的見解が中心的であった。だが、この共通の社会的性格の母体の母体は、さらなる抽象的な高次の人間性の構成要素の概念であり、彼の「人間性」の中核でもあり、それ故に母体そのものなのである。とすれば、「ある存在様式」も「持つ存在様式」も、社会的性格論から一貫したフロムの「人間性」理論の中心である。社会的性格は人間存在に本来的に根差す二つの基本的な存在様式、即ち「持つ存在様式」と「ある存在様式」の支配する割合に応じて変化するという点でも、そのことは具体的に確認できる²²⁾。両者はともに「二分性」を克服しようとする人間の努力に由来する。フロムにおいては自己と世界を理解しそれに意味付けをしようとする人間の生への努力の方向性は、「持つ存在様式」と「ある存在様式」という二つのベクトルで決定付けられているのである。

そして、「持つ存在様式」の方向づけが、社会構造によって優位に決定づけられ、経済的社会的な現実に基づいた大衆の生活体験になっている場合、そのとき人間は、“I am = what I have and what I consume” (私はあるイコール私が持つものと私が消費するもの)²³⁾ という形で自己を認識する。このように「世界に対する私の関係が所有し占有する関係であって、私が私自身をも含むすべての物を私の財産とすることを欲する」²⁴⁾ 関係が生活の基本的関係であるとき、その態度は「持つ存在様式」に優位に支配されているとされる。それが、「二次的な自己意識」を手段とする、非人間化状況を防ぐ方策である。そしてこうした疎外された自己感により、「持つ存在様式」が優位となる社会的性格が成立する。それが現代社会の社会的性格である。

しかしながら一方、人間が真の本性から導かれた生産的仕事・愛・思いやり、他人と与え分かち合い犠牲を払う意志によって「我あり」と感じるとき、人間は既にもう一つの「ある存在様式」

を経験しているという。フロムの言葉でいえば「ある存在様式」とは、「人が何も持つことなく持とうとすることもなく、喜びにあふれ、自分の能力を生産的に使用し、世界と一つになる存在様式」²⁵⁾である。前述したように、これらはフロムが従来「生産的」な性格として表して来た性格構造であり、のちに「バイオフィリア」として説明する、人間の善性を示す重要な一要素である。だが、「あること」への道はナルシズムと自己本位性を突き抜けることが条件であるとフロムが述べる²⁶⁾ように、それはただ単に人間が個としてそこに「ある (to be)」だけでは、満たされ得ない。必ず他者との人称的な「生産的関係性 (productive relatedness)」——つまり何かとつながって存在すること (“to be something”)——によって、敢えて具体的に言えば、他者への思いやりや犠牲、分かち合いや奉仕といった人間的行動、あるいは人間の本来あるべき力を発揮した結果得られる疎外されていない「生産の仕事」に対する「関係性」によって満たされる。つまり、自分自身以外の疎外された物を「持つ」ことが、孤独な一人だけの自己確認であるのに対し、「ある」ことは、分かち合うことに始まる人間的な自己や他者との「関係性」の上にあるのである。

さて、このように概観すれば両「存在様式」は掛け離れた性質の様式であるかのように思われる。だが、最初に確認したように、フロムにおいては両者とも人間存在に内在する二つのベクトルであり、どちらかが優位となるだけで、その一方が増加すれば他方が減少するといった性質を帯びている。とすれば、「ある存在様式」に至るのには、まず「持つ存在様式」を認識し、変わる意志と勇気をもち、それを減らす実践を伴うことが必要である。しかもその際には、自己中心性やナルシズムから脱却し、取得的な存在様式でのモットーである「わたしはある＝わたしが持つもの」といった心理的定式を打ち破ることが必要である。そして「わたしはある＝わたしがする (“I am what I do”）」という真の自発的な人間的行動をなしえることが必要である。しかも、疎外されていない行動をとり、単純に「わたしはわたしだ」ということではなく、それ以上に、「生産的関係性」のなかで“I am what I am”ということを知ること²⁷⁾が「ある存在様式」なのである。このように、単に自己、消費財、快楽、他人を象徴的な意味で「持つ」ことで、「我在り」という自己感を持つのではなく、真の疎外されていない自己へと、その自己の存在を「持たれていない」あらゆる世界に関係づけるといった「関係性」が、「ある存在様式」の中心である。ここでは詳論できないが、従来「生産的」といった用語でフロムが示して来た「人間性」の在り方を、より概念化して抽出した人間存在の本性が「ある存在様式」であるといえよう。そしてこうした「関係性」は、「関係性」の網の目である共同体や社会で満たされ得るであろう²⁸⁾。そこでこそ肯定的な「正気の」自己確認が可能となるのである。

しかし、現実的には「ある存在様式」の理解にはさらなる困難が伴う。その一つは、フロム自身も「ある存在様式」は言葉では表現不可能で経験を分かち合うことによるのみ伝達可能としている²⁹⁾ように、共通体験を記述できないという点にある。とすれば、「ある存在様式」に基づく行動様式である「あること (to be)」はどのようにして経験されると理解すべきなのであるか。この点を検討するには、フロムの遺稿管理責任者のライナー・フンク (Rainer Funk) の次の叙述が参考になろう。「持つ存在様式を生み出す経済的現実を変えることなしに、個人がただ知覚・意識における精神的な福利と発達、自分自身の分析を求めればよいといった意味」で誤解されるのをおそれていたために、フロムは“To have or to be?”の植字原稿から「あることへの歩み (“Steps toward Being”）」とでもいうべき一章を省いた³⁰⁾という叙述である。この叙述から、「あ

る存在様式」が人間存在に根差す存在様式ではあれ、現代社会では十分に体験されず、社会の変革と同時に真に理解されると解釈されよう。こうした社会変革や力動的な社会関係による社会的性格の変化を度外視して、「ある存在様式」を真に理解することが不可能であるといったフランクの見解は、フロムの基本的な社会批判の立場に鑑みても十分な説得力がある。そのことはかえって逆に、「ある存在様式」を理解するうえでの困難さを増加させることになり、容易にその困難さを払拭できないように思われるかもしれない。

しかしながら、繰り返すが「ある」行動様式は我々人間の生物学的な本性に根差している。そのような「あること」に基づいて、人間が日常生活で「喜び (joy)」を見いだしたり、他者との「関係性」に一体感を感じたり、「生産的」な仕事に充実感をもったりする場合は多々ある。残念ながら、確かにそれがどのような性質かを正確に言語化することはできない。だが「あること」は厳然としてある。とすれば、早期から「持つ存在様式」に根差す人間の性格構造の在り方を漸次縮減するといった方策と、このような「あること」を体験する環境、例えば野外活動やキャンプ活動、ボランティア活動や福祉活動などの、心暖まる小さな共同体での経験で「あること」を共に経験することがその理解への援助となるのではないだろうか。こうした経験は、産業社会のプログラムを再生させる装置の中では評価されないであろう。だが、「ある存在様式」が優位に支配する社会的性格を形成する上で、その援助となる<教育>にはかなりの現実性があるように思われるのである。そうした「あること」の端緒はどこにでも豊富に見受けられる。確かに人間と社会とのダイナミックな相互関係や、「ある存在様式」が社会変革によって真に理解され実践されるという点を無視することはできない。だが、両「存在様式」は人間の性格的な存在者としての在り方を方向づける基本的な人間の様式である。それは既に我々の内に“ある”のである。そうした信念に基づき、それを未来世代の形成者とともに「あること」を経験し合いながら、「ある存在様式」優位の性格形成を目指すことが、今後の教育活動のなかに求められてもよいのではないだろうか。

また、社会システムに関して言うならば、当然こうした「ある存在様式」と「あること」の機能は、社会変革への「起爆剤」となる。それが危険視されることもあろう。しかも、心理的メカニズムとしての社会的性格を想定した段階では、未来社会への「起爆剤」となる役割は指摘こそされ重視されてはいなかった。だが、彼は最終的には「あること」の優位に根差す人間の性格構造の変化を提唱する。そのとき、社会的性格が基本的な生活体験と社会経済体制を変革する可能性を有しているということは、フロムの「人間性」論において重要な意義をもっていたと考えざるを得ない。その変革へのエネルギーが、社会的性格の「起爆剤」としての機能の中に存するのである。もとよりフロムには、社会体制のために人間を手段にするべきではないというタルムードの教えを忠実に引き継いだ、人間性に対する揺るぎない信頼がある。その信頼のもとに、この社会的性格のエネルギーを一般大衆が持つことを彼は要請しているのである。そのことを加味しつつ、しかも、地球環境問題の危機の回避という現実問題に直面して、その変革論は危険視されることを恐れ、逆説的に将来への希望となり得るのである。そこに環境教育の果たす役割を見いだせるであろう。

三節 フロムを基底とした環境教育の理念構築へ向けて

さて教育の分野でも、現在、人類の生存を脅かす地球環境問題の顕在化に伴って、環境教育の重要性が叫ばれ、環境教育が広範な領域で実施されるようになりつつある³¹⁾。なかでも、道徳活動や特別活動で、環境教育を発展的に実施しようとする動向がある³²⁾。このような動向は、自然環境を理解し、科学的知識を身につける環境教育³³⁾にとどまらず、道徳教育や人間形成の教育として環境教育が発展する端緒であると看取されよう。あるいは、環境問題に対処する能力を育成すべき環境教育が、新しい倫理観や道徳観を必要としていると解釈することもできる。

だが、道徳教育や性格形成の立場から、より広義の概念を包含した教育として環境教育を理解するとき、主として三つの問題が生じる。第一に、生活実践において環境に対して道徳的・倫理的責任ある行動をとることのできる人間学的規範を示すことが可能なかどうか。そして第二に、そのような道徳的行動をとった場合、個人の幸福感や自己実現、人間的成長が達成されるかどうか。第三に、道徳的な指導によって個人の『態度・行動変容』が可能になった時、その社会的・経済的影響に責任が負えるのかどうかといった問題である。そこでは、総じて、環境問題を解決するために、新しい生活様式・社会経済的構造、文化・倫理を含めた新たな人間像が必要であり、新しい人間の道徳や性格モデルが必要となることが問題となるのである。とすれば、環境教育を効果的に実践するためにも、未来世代のために、新たな倫理感覚と社会システムを選択し構築していく能力が要請されているといえよう。

もっとも、このような人間社会の変革の必要性は、現在ではじめて指摘されることではない。既に1970年代から、人間の行動や現代社会の全体的構造を根本的に変えるような新しい形の思考、あるいは個人、国家、世界の各レベルでの価値観や目標の根本的な変更なしには人類が生存できないという見解が出されている³⁴⁾。また現在でもなお、「私利と物質的進歩の追及に基づいた西洋の個人主義的行動モデルが信頼を失いつつある」³⁵⁾とされている。そして、「環境教育は自然における人類の位置を理解させそしてまたその位置を将来にわたって保つのに必要な永続的倫理についても理解させるよう導くべき」³⁶⁾であるといった展望も開けている。このように生活様式と消費行動のみならず、根本から、倫理観や価値観、社会システムを変えなくては、人類に進むべき道がないことは十分に示されている。もし前節までの考察からフロムに引き付けて言えば、究極的に、基本的生活様式を含めた消費のスタイルそれ自体と、それに付随して獲得される「二次的な自己意識」感とその行動や性格構造が、「ある存在様式」へと変化しない限り人類の持続はないのである。このように、様々な必要性は、フロムを引き合いに出すまでもなく、既に二十年以上も前から、各学問分野で多くの論者たちが指摘するところでもある。

だが逆に、生活の変化や消費行動、ひいては新しい倫理や自然に対する新しい態度のような、人間の基本的生活の在り方は、それらが独自に変わり得るものではない。フロムに従うなら、あくまでも生の全体性を取り巻く人間の社会経済的構造、社会的性格、基本的生活体験が総合的に変わることによってダイナミックに引き起こされる。その全体構造の中心たる社会的性格の方向づけが変化しなくてはなるまい。もっとも性格構造に根本的な変化が起こる場合には、人類が心理的にも肉体的にも「無価値な存在に墮することなく」³⁷⁾救われなくてはならない。そこに「ある存在様式」の可能性が開けている。としても全く新しい人間観が必要なのではない。人間性の

本質は変わらない。ただ、人間を取り巻く状況が変化し、世界と自己に対する方向づけの基礎たる社会的性格が変わることのみが必要なのである。第一の問題であった人間学的規範は、「ある存在様式」を中心として示されるであろう。そして、それを今後の環境教育の理念に生かすことで、そういった問題は解決されであろう。

ところが、こうした危機的な地球環境に直面し、これ程までに「人類の肉体的生存がまさに人間の心理的な変革の度合いにかかっている」³⁷⁾ なかで、現在までにさほど多くの努力が払われてはいない。それは、人間にとってためになるものが重要視されているのではなく、経済の発展と産業社会の持続こそが最優先されてきているからである。しかも、こうした人間の消費スタイルとライフスタイルの根本的变化は、現代人がそれによって獲得して来た「持つ存在様式」の自己確認の方策を捨てること、及び消費行動の減退によって現代産業社会システムを捨てることに直結するからでもある。仮にもし生活面での消費制限を推進するなら、「持つこと (to have)」での自己確認が不可能となり、さらに現代社会システムが根幹から揺り動かされることになりかねない。よって別の存在様式を抑圧し、新しい社会システムへと飛躍する勇気を持っていないのである。しかも同時に、「持つ存在様式」とともに、産業主義社会を支える心理学的前提、即ち「徹底的快楽主義 (radical hedonism)」と「自己中心主義 (unlimited egotism)」³⁸⁾ ——つまり、利己心と貪欲さはこの社会システムに調和と平和をもたらすという仮定のもとに、人生の目標が幸福、すなわち最大限の快楽であるといった心理的前提——は早晚根底から覆されなくてはならないであろう。それは一見困難であるかのように見える。しかし困難ではあれ、前節でみたように真の自己実現や人間的成長は「あること」によりもたらされるのである。とすれば、第二の問題も、人間の善性の開花に伴う、乗り越えなくてはならない苦しみである。そういった歴史的発展の観点からすれば、現在の「持つ存在様式」の割合を減らしていくうえでの困難さは乗り越えられるべきであろう。

さて、いまやこうした政治・経済・産業社会全体を含んだ社会システム優先の世界観から、それら全ての社会環境をも包含する包括的な全体的“自然”としての自然環境・社会環境の持続を目指せば、新しい倫理観と世界観を備えた人間存在の在り方と新しい社会システムが要求されることになる。どちらにせよ、社会経済的構造と社会的性格は力動的な関係に基づき相互にそれを形成する。とすれば、「持つ存在様式」に根差す人間の社会的性格の方向づけは、それを優位にした産業社会全体が減退し衰退すれば、「ある存在様式」を優位にした社会が漸次構成されていくであろうという楽観論に立脚することもできよう。そこには教育の入り込む余地などないようにも思われる。だがフロムのいうように「ネクロフィリア」といった死や悪への誘惑もまた人間には存在する。そのうえ又、クナップが言うように社会的性格は教育を通じて形成される部分が多い³⁹⁾。教育と社会的性格の形成とは密接である。とすれば、このまま「持つ存在様式」を優位にする基本的生活体験を教育の中心におくことは当然疑問視され、楽観論に安住することは不可能であろう。そこにこそ、「あること」を体験し、「ある存在様式」を優位とする教育の必要性がある。さらには、それは教育の可能性の根拠としての人間性に基づいているのである。それ故に、先ず人間の性格構造を変革し、それによって新しい社会システムがゆっくりと醸成されていくのを待つことが肝要である。とすれば、今後社会システムの変革を視野に入れながらも、先ず以って、人間の性格構造の変化といった役割を環境教育が担わねばならないであろう。むしろ、第三の教

育の責任問題は、問題ではなく「生産的」な未来社会のありかたを模索して行く上での進歩のエネルギーであると理解されなければならないであろう。

以上のように、「持つ存在様式」を乗り越えて、未来社会の人間を形成していくとすれば、別の生の様式を希求していかななくてはならない。そこにフロムのいう「ある存在様式」の可能性が開けているのであり、それを優位にする性格形成によって、環境教育での性格形成や社会の問題が解決する糸口を発見できるであろう。そのような社会的性格の形成の役割を負う教育としても環境教育が発展することが必要ではないだろうか。

おわりに

今後、環境教育は、より広い領域で人間教育として倫理的・心理学的に位置付けられ、道徳的指導の観点と性格形成の観点から実践されるべきである。ただしその教育を実施する際には、人間存在の在り方と生き方を根底から再考し、社会経済的構造への影響を十分に考慮できる人間形成を目指さなくてはならない。その際、小論で論じたように「ある存在様式」による社会的性格の形成が重要な要素となるであろう。今後、環境教育が「あること」の体験を通じた社会的性格の形成に繋がれば、新しい倫理観・社会観・人間観を身につけ、自然環境と社会環境に対する理性的態度をとれる人間を育てていける可能性が開けている、と結論づけておこう。

註

- 1) Rainer Funk, "The Erich Fromm Reader," p. vii. Humanities Press International, 1994.
- 2) Erich Fromm, "The sane society", Fawcett premier, 1955. 以下, SA と略記。
- 3) Erich Fromm, "To have or to be?", Bantam books, 1976. 以下, TO と略記。
- 4) 前掲書, 佐野哲郎訳, 『生きるということ』の「訳者あとがき」, 267-269 頁。紀伊国屋書店, 1977 年。
- 5) Erich Fromm, "Escape From Freedom", Avon books, 1965. 以下, ES と略記。
- 6) Erich Fromm, "The art of loving", Harper & Row, Published, 1956.
- 7) Erich Fromm, "The revolution of hope", Harper&Row, Published, 1968.
- 8) Stephen Eric Brooner, "Fromm in America", p. 44. (Michael Kessler/Rainer Funk (Hrsg), "Erich Fromm und die Frankfurter Schule", Francke Verlag GmbH Tübingen, 1992, 所収。)
- 9) とはいえ教育学と全く無縁ではない。e. g. Johannes Claßn, "Erich Fromm und die Pädagogik", Beltz Verlag Weinheim und Basel, 1987.
- 10) Claßn, Ebd., s. 7.
- 11) Brooner, op. cit. p. 44.
- 12) ES, pp. 304-327.
- 13) Erich Fromm, "Man for himself", Ark paperbacks, pp. 38-39, pp. 40-44. 以下, MA と略記。
- 14) Erich Fromm, "The anatomy of human destructiveness", AN OWL BOOK, 1973.
- 15) MA, pp. 210-211.
- 16) MA, pp. 13-14.
- 17) MA, pp. 40-50, TO, p. 92. p. 96. SA, p. v, など。
- 18) MA, pp. 40-41.
- 19) TO, p. 15.
- 20) MA, pp. 21-24.

- 21) ES, pp.304 - 327.
- 22) TO, p. 12.
- 23) TO, p. 15.
- 24) TO, p. 65.
- 25) TO, p. 6, pp. 87 - 90.
- 26) Erich Fromm, "The art of being", Constable London, 1993. 以下, AR と略記。
- 27) AR, p. 117 - 119.
- 28) 例えばアーミシュなど。詳しくは坂井信生, 『アーミシュ研究』, 教文館, 1997年。
- 29) TO, p. 15.
- 30) AR, p. vii.
- 31) 環境教育推進委員会編集, 『環境教育実践ハンドブック』, 第一法規, 1992年, 参照。
- 32) 例えば, 押谷由夫 / 編著, 『小学校道徳ですすめる環境教育』, 明治図書, 1994年。
- 33) 加藤秀俊編, 『日本の環境教育』, 河井出版, 1991年, 参照。
- 34) D. H. メドウズ / D. L. メドウズ / J. ラーンダズ / W. W. ベアランズ三世, 大来佐武郎訳, 『成長の限界』, ダイアモンド社, 参照。
- 35) ダグラス . H. ストロングとエリザベス . S. ローゼンフィールド, 『倫理か便宜か』(京都生命倫理研究会訳, 『環境の倫理』, 晃洋書房, 1992年, 所収) 7頁。
- 36) V. B. シューファー, 内田正夫訳, 『環境教育の夜明け』, 日本経済評論社, 1994年, 176頁。
- 37) D. H. メドウズ他, 前掲書, 186頁。
- 38) TO, p. xxv .
- 39) Gerhard P. Knapp, "The Art of Living", Perter Lang, 1989, pp. 48 - 49.

(博士後期課程)